ことはの玉緒　三

ホ 2
4815
3

詞瓊綸三之巻

○その結びハ。紐鏡の右の行結びの辞まで。一の巻に出せる三行係辞結めし。但し三行のうちぞや何こそ結びは紐鏡中の行左の行乃定まり結びごとくにてそかハ太りくみぐりに結びうくれをもと後の結びを三行の中の行左の行の辞を除きてまつそぬしと右の行結むすび乃さざまれる辞のとなへびてふをはそてもし何すても麿く略るし論ありいまあまた代かく右の行に定むることは。此三行の辞よりて結ぶうれ。そのや何こそに對してかなしびさざまるもつ分かゆゑなり。

水 2
4815
巻 3

○動かぬ言にて結ぶぞ

古十九 青柳をかたいとによりて鶯はぬふてふ笠ぞうめは花笠

拾一 あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝ物ぞうぐひすの声

新六 おのづから音するものぞ庭のおもに木の葉吹まく谷の夕風

同五 さびしさぞみ山の秋の朝ぐもり霧にしをるゝ槙の下露

後十七 よをそむく苔のころもぞたゞ一重かさねばうとしいざふたりねん

新十一 わが恋ぞ松の下葉にふる時雨ぬるとも袖の色にいでめや

同十七 時しらぬ山ぞふじのねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん

○いひかけて結ぶぞ

後拾十九 かゝるさぞまちこゝろみよかくながらよもたゞにてぞやましなの里

千十四 行ふねぞいさゝ細江のみをつくし深きしるしもなきよなりける

新十七 世中をそむきにそてもあしからぬまさきぞあれまくの里

○ぞを重ぬる格ども

古二 ぬるきなくなりにし時はねよといろぞかはれぬ花ぞさかりなる

同四 いつぞとぞときぞわかねど秋の夜ぞ物おもふことのかぎりなりける

これらハいづれ何となくかさねたるも

又一つの格也

古四 里ぞあれて人ぞふりにし宿なれや庭もまがきも秋ののらなる

同五 秋ぞきぬもみぢぞ宿にふりしきぬ道ふみわけてとふ人ぞなし

後五 色の光しるしぞつれなし秋風ぞ人よりさきにふきぬとぞ

新五 むしぞこそ風に木の葉ぞちりそめてよなよな虫ぞなきよわるらし

右のたぐひ一つは格あり
又ことくかぎりをお對へていふ也

古一　みよしのの松のあらしふきさえてやこそえのべの山もみつくなる

同　人えいさかろを志のびふるさとえ花ぞむかしはかくなひける

同三　志忍えして淺ええしぬ郎いまかこころとでのむつきかくらん

拾十一　いかでせん命えかぎりあるもをおもひえあすまで人え待まなし

右の內みやまハのあと新ハしてのあと八二つのえあはしまさしくお對へり。又そのいさのあハ上のえハ花と對ひ。下のえハ對なぞいかでせんのあハ上のえハ下句と對ひ。下の二つのえハ前にいぎる一格のえなり。
又え二つえ二つあるあ

古一　身ねまをよろひえおいぬ志らえあまで花を見ればおもひもなし

○一つのえ

古十六　かぞくに春をまされぬおもしば山のかすみをたつまとええよ

後四　あふさかに八二つの川原を七ゝたり後のみそらをさそぎみえせよ

新勅八　かへりくばまたあふ山乃峯おぼつかなきこころをまちりにえせん

夏万下　わかれひみハ大えさんやわかん淺き和くる雲をかぶりにえして

いづまとも何の名はえてふるさとおもり此をききとといつるあと
千載集十七よし行も

○あえのえのえ

後拾三　五月あえみ川のこまれのまこと来かりほを跡もたてじとぞなりふ

同　はるこぞまええてし小篠の原もあし行さ於流のこちのつして
これら有月あまれいまさえ此淺あまれ於あこれ此えおなし

○えこそ

古十一　春日野の雪をわけて生ひいづる若菜をみな川々にえこし春えこそ

同十七　さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも
同九　みなぎらふ沖つ小島に妹しあらば見てのみやきの雲みなりはも
万三　やき津へにわがゆきしかばするがなる阿倍の市路にあひしこらはも
此辞ノ萬葉集にハ吾がせしにあはしいもと有て いとふるきさまなり
君そもと有ていとふるきさまなり

○強く添るも

ぞも　三の意ぞの詞より出たる　やも　四の意やの詞より出せり　かも　四の意かの詞より出来ル　いづくも　四の意何の詞より出せる

こそも　五の意こその詞より出たる　よりも

右のもろもろの類ハ。たゞ強く添るのみにてことなることなし。然り
のぞきても同じくきこゆ。又たとへバ。ぞとも やとも かとも よりとも
いひても同じきこと也。

○なや　四の意歎息(なげき)詞やの詞より出せる也

む

○満(みぞ)るだに。既に然る事をいふと。未然(まだしかる)事をかけていふとの二つあり。既に
然る事をいふは。花さけど。花ちれど。月出れど。月入れど。などのごとし。
未然る事をかけていふは。花さかど。花ちらど。月いでど。月いらど。などの
如し。さて既に然る事にいふどハ。どもと。おと対ひ。（花さけども花さけど。花さかども花さかど）
月入れどもと。未然る事をかけていふどハ。上を將じて。ともと対へり。（花さかども。と花さく）
ごとく対ひ。月いでども。月いらどもと対ふがごとし。
上を將ずとハ。かくハくみ將じでハつく將ずるがごとし。

〇をぞ　これハなにをぞなにをぞなにをこそなにをやなに轉じていふべし。かく
のごとく轉ずるハ。をぞのぞのことなり
をぞ二つに對へてよめる歌
古八　秋萩の花をぞ雨にぬらせども君をぞましてをしとこそ思へ
〇しかぞ　此しかそハいひをさむる辭の心也。さてしかとつゞきたるハてその結びの
しかと一つなり。又しかぞハしかぞとも對に辭也。
古十五　わかうしも夢にえしかぞ過ぎにし思ハぬ中ぞえられけかりける
旧十八　旅を旅するにそ結ぶしふかりしかぞうた先をみつのかたと旅すれ
後九　秋の田にかりてふたとせかりけしかぞ思ひいづるがくれしぎもなし
新十六　ふるのえとし人をまつらば山のはにさよ更しかぞ月をもいりにき
ふしばてしかぞといへるも有
拾十二　身に寒のかはりふしかぞ思ふまど人乃ちぎりんおとぞこひしき
続拾十九　むかしにかへるかたふひのうげきえてしかぞ身へふりもふれかりけり
〇なぞ
古十五　それのみやよそにひきしめしびん人のちぎりはなをとぢりなぞ
後八　山ちかくえづらしぎなくゆるやまにしかくやなるん身つのりなぞ
古八　かつ山わかれハきけどまがまみえなぞちひしかるべし
旧十三　あそびしてこよひあひなぞ来ぬ日の去くや人をつらしと思ふらん
なぞ二つ有るハ
後六　あさまゆりゆかなぞ人まえせもかへぞちりなぞ晴えそ折る秋萩

○てば　これハたゞてといふことまでを今とおなじ辞ぞ（くらべてみるとて しあひなしよ）
とく六の巻の序にの説あり くはしくいへり

万十五 秋さればあへるいが裳ぬれぬとも君が御船の綱しとりてば

古一 うめが香を袖にうつしてとめてば春はすぐともかたみならまし

同七 わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてば思ひ出にせよ

同八 わかれてば ほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき

同十三 みちのくにありといふなる名取川なき名とりてばくるしかりける

同 わが恋をしのびかねてばあしひきの山橘の色に出ぬべし

後十一 あひみてばなぐさむやとぞ思ひしになごりしもこそ恋しかりけれ

拾十八 大ぞらにてる日乃色をいさめてば天の下にはたれかすむべき

栄花ノ月記 たゞ形しどとバかりたてくらひならふる御方てばといふくみかへかし方し

其のてばいづれもぞかし濁るべき辞なる故。清てよむも又ひがごと

なり。おなじ紫にもみな濁る者は字をきらへり。古の十五なるを見てそ妹

背なる山のすゞのねむひのてそとハ異なり

○せば　せばといへどおほくハ下にましといふ例也

古一 世中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろはのどけからまし

同五 もみぢ葉のながれざりせば立田川水の秋をばたれかしらまし

同六 梅の香のふりおける雪にまがひせばたれかことごとわきておらまし

同十四 いつはりのなきよなりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

同十一 またなくみるめあひせば衣袖乃なみだの川にまよはまし抔など

円十二　おもひつゝぬればや人のみえつらん夢としり せば さめざらましを

又せばとあるハ上へかへりてましといへり

古十五　見すまを花たにみえしましを あふとみてかくうつれ栖としり せば

後拾一　よの中に何ならまし 山ざくら見ゆるわざのこころなかり せば

又ましといへるをとまれにハ こと　ことハいへりく　まれにあるべし

古四　をみなへしおほかる野べにやどり せば あやなくあだの名をや立なん。

後九　ちゝ川海は深さもこゝろのなかり せば なにかハ人を恨しもせん。

拾二　さよ深く旅ねせざり せば 郭公人づてにてきくべからまし

○上には不を添て不せばといひて結び五の哥は不の紛に出せり

○ましかば　ましかばとあるハ下に必又ましといふ例也

古十五　人まどびきこえな ましかば とびつくもなにぞとくぞいひてまし物を

後二　山里にしりな ましかば さくらむあはぶさくらもちらざらまし

円十二　いつか涙のなかゝら ましかば 露のおきてわびしきを見せましや

拾十九　おやのたやくおもひ ましかば こひてましかはまはいかぬらるべし

新十六　露のいのちきえな ましかば かくばかりふる白雪をながめましやは

又ましかばとあるハ上へかへりてましといへり

後十六　思ひ出てとふ言の葉をたれ見まし 身のしらくもとなりな ましかば

新十三　忘れゆきて君につげまし 小笹乃おもひにきえな ましかば

円十九　うれしさをなにゝともいかゞあさへまし 左合人かとなりな ましかば

又ましかばとありて上へハかへらで下にことをぬくめる有

拾三
いたづらにふる月日をたなばたの逢夜の数とおもはゝ ましかば
これは逢夜の数ぞと思はましかばうれしからましといふべきを略き(て)下にふくめていひのこせる格也 次の哥共も皆同じ格也

後拾一
花見てぞ身のうきことはわすらるゝ春はかぎりのなからましかば

同八
みやこいづる今朝ばかりだにはつかにもあひ見て人をわかれましかば

同十五
月影のいるをゝしむもくるしきに西には山のなからましかば

同十六
ゆくすゑのあはれをそきてゆくすゑこゝに心を入とおもはましかば

詞十三
たのめぬに君くやとまつよひのまはふけゆかでたゞあけなましかば

同
きのめくしこれは紫だりそめ出て浅茅が露ときえなましかば

右の格後拾遺に殊におほし 其後もつぎ/\おほかり

後拾十五
山のはのなからましかば池みづにいりぬる月をかくさゞりけり

これは逢りにあらざれども ましかば までかけてうけたる ましかば といふ言を ふくめたる事あれば格は同じ

拾二十
よの中にあらましかばとおもふ人なきがおほくもなりにけるかな
これはあらましかばよからましといふべきを例のはぶきてとゞめたるなり

右の哥どもはおほく。下にいふ詞をふくみていひさしたる例也。心にも
あれども ましかば は諸集に多く有て一格の事也。○ましかば の外に
も後拾遺に見ゆ
たなばたの年に一夜のあふことをまちつけてこそかぞふる月毎の七日ありせば 同十九 あひてやはあまた
せざるべき津の国の今ぞいくたのかりとらひしそ 千載十三 とぐさこそ拾ざ
見えのかぎりてはたちぎりしるはうつりせば これかりと共にひまて
てまこをなくめでも紫すも此の花につくるには人もえいろぞ見るに
妹がためくをまたぬらしえで 同十 人をそ夜半の袖は涙くな嬉しく涙と
したがひさかり稲で 同十五 秋萩りも色ある衣裳ぬれとなるともおがはの
住なしきりてぞあはれると同じ

○ませば
これはましせばといふべきを略きたる也。是もおほくは下にましといふ

後十一 夢路にも宿かす人のあらませば寝ざめに露ハ払ハざらまし

古十九 さらばよと別れし時にいはませば我も涙におぼゝれなまし

拾八 万二 飛鳥川しがらみわたしせかませば流るゝ水ものどけからまし（よどにかあらまし 万）

新八 何とも人のいのちをしらませばなにその名を籍らざらまし

後拾十二 枕もそゝる門あらませばいひてましものをかくぞしるべき

下にましといはざるハ

万十五 かくばかりこひんとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべかりける。

此歌拾遺集恋五にハかくばかり恋しかるべきものとしりせばとありさて萬葉のもませばといへるハおぼつかなし此歌のかハ之を下にましといへり

○ぬふのをの係ぞ

古四 天の川浅瀬しら波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

新一 万十 まきむくの檜原もいまだくもらねば小松が原に淡雪ぞふる

此歌万葉にては冬の歌にてくもらぬにといふ言を新古今にハ春の歌に入られたれハかはらねばといふ言もまじへたれもしらねど今ハ萬葉の言をとりてこゝに出せり

此辞萬葉に多し。七の巻古風の格に出せる

○ぞや 此辞三くさあり。皆四の巻やの格に出せり

も

○もの結びぞと全く同じ。そは既にいへるがごとし

○動かぬ言にて結ぶも

新十七 花ちりてたゞ柴の戸をさしておもふあるじのおく[も]みよしのゝ山

○玉のを三　○九

後拾一 後撰十 明るくるおじをかけて見渡せば庭のうへ[と]たき川に流

兼輔集 時しなきふるはやく花もしぐれば山べりしかのせぬ[と]なく[と]わかき

令八 ぬる人といふ[と]ことなりけよ中に人乃こころをそらにふきくれぞ

新十八 さくらがりの花にまかく[と]同じさく まださき宿にといくよるは香ん

○いひかけて結ぶと

後十五 これやこのゆくとかへるとわかれつゝしるとしらぬ[と]あふ坂乃関

令七 しのぶどころひ[と]なぎさのあまをぶね 浦のうきても今はあのまじ

千九 年経へくむかしをしのぶころのうちはつきて[と]ふるさとのさと

新古 なき恋ぞ庭のむし萩うらがれて人ももと[と]あきの夕ぐれ

円十七 一すぢにあまたなさて[と]ちりぢりの庭にやうらくうつる風の音かな

○とをかさぬる格

古一 君ならでたれにか見せん梅の花いろを[と]香を[と]しる人ぞしる

新十 さらがなるう川の山べのうつくに[と]夏なみ[と]人にかくぬもりなりと

古二 はるこめて春のゆくへ[と]しらぬまにまちし桜[と]うつろひにけり

新十六 見て[と]又々[と]見まくほしかりし花のさかりはすぎやしぬらん

これらハつねにおほくある也

後拾六 木のはちる宿はきゝわくことぞなき時雨するよ[と]時雨せぬよ[と]

これハうちかへして行る故に一首にまで候也
四つまである也

円十四 白露[と]ゆめ[と]此世[と]まぼろし[と]たとへていはゞ久しかりけり

これら一つ二つ四つまでもあり
又二つぞく二つまでもある也

古十三 君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

後十五 これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふ坂乃せき

よつ重なれるハ

後拾四 秋も秋こよひもこよひ月も月ところもところみる君もきみ

五つも

六帖 をとゝしもこぞもことしもをとゝひも昨日もけふもわがこふる君

○んのうへのも

千四 人もがなみせもきかせもはぎが花さく夕かげのひぐらしの聲

千十五 恋 身をしれば萩の下根にすだく虫のねをだにしられぬ見せもきかせも

此哥も右の和泉式部が哥によりてよめるなり。そもそも見せんきかせんといふべきを。語るに云百首哥今ふ有家で言うづむれをみとりに吹くへし見せもきかせもと

山おろしの風 是ハ上の和泉式部が哥の。見せもきかせもせんといふところを見誤りて。見せもきかせもする山おろしの風といふ意によまれたり。むげにことなし。後の人も此意に誤りてよめる哥あり

んをもといへる例。あまた万葉集にあり。その中に古風の歌に出せるを。

また万葉集に宇倍都子年(ウベム)とかき。又ともを廃(テム)とかき。

又続紀詔にハもといふべき所にんといへる多し。これらもおなじ例也。

○深く添るも

古十五 あしべより雲ゐをさしてわたる雁いやとほざかる我身かなしも

同墨滅 わがせこがくべきよひなりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

拾三 万八 秋たちていくかもあらねど此ねぬる朝けの風ハたもとすゞしも

同十三 わがせこがかりほもあらでねるよハ曉かくれまくらさびしも

同二 郭公なくやさ月のみじか夜もひとりしぬれバあかしかねつも

〃二十 我代よりはちはの浦りまみしてもぬらん年の限はしらねども

後二 百十 まちとはばたがまたおもはむき夕月夜おぼつかなしも花陰りして

此すもを今の本に身くもとあるは誤なりと云帖りいふしもとかもぞ正しき万葉の訓もこれもし

右のからしも まししも あるど。これ猶もも よ第ち格なり。お

葉には妹ふまぐいひし。七の巻古風の部に出せり。さて右の外

のもハ強く流るゝうちふりつくる歌ぶ(おゝき)のさきをこそ見る。

さへも だにも よりも なれも つべも なぞも

此まなびのも 万葉には猶多し 古風の部にいり出せり

もも 三の巻その部に出せり。 ぞも りぞ ぞもぞ いづれも三の巻その部に出すもし ともこそ ぞもこそ 二ともに六の巻

こその部に出せり やも 四の巻やの部に出せり かも 同巻かの部 しも 五の巻しの部に出せり

○さても 俗に迚の字をかく也

新拾十 さてもかくかりける世をばいとふなどあき人のつらさなるらん

新後拾十六 なかなかに久米のいは橋さても猶渡りはつべき契ならねば

これハいやしき詞にて古くハ哥にも文にも見えたることなし

心得べし 何ぞさてもなどいふやうにいふさてもハ別也

ぞ

○ぞの詞ハ。紐鏡の中の行のはじめの辞にて。一の巻に出せる三格徒の

○うたの中にぞは、など結べる歌おほくして。んとよめる歌は、おのづからかなはざる文や
し何などは疑ふ辞なるを。おのづからんとよめる歌かなはずして。など結べるはまれなり
しこともおのづから
よろしきものも、ありくれて、ふきはの中にぞや何てそは結びに結びを
正しくせざれば、そのひがごとになるなり

○その結び辞をかきながら、格下へ続きたる歌

後十一
いひえてはなぐさむやとぞ思ひしに名ごりしもこそ恋しかりけれ

堀川百首
ちりはぐる花うらみてのべにぞきしこゝにこよひはやどりぬあふの松原

後拾遺
おなじくぞ君つもらんと思へども君なる山とはまづぞ恋しき

右の歌どもしといひけんといふは、ぞの結びなきぞかし。是も下へ続きたる歌にいづれもよろしき也。此格の格をもちふべきこと。（俊成卿の歌をも引てこゝに出しつ）
きしめけばそれとかはひとでやはらをさまし。此歌は詞よよろしからぬぞそのひがごとなれば、それをぞよくこゝろえ心得て写し誤まる物なるべし。

○その結び辞を轄して下へつゞきたる歌

玉葉二 小式部
をりとぞよそに見つれどはなかなかちりもしなまし雲となりなむ

同十八 読人しらず
けふもさぞなかりけん身をさそひけむぬばかりぞ我をなれども

為家
みづからしき春も明月とぞ此の世はなれをかなふなるまん

右いづれも歌と結ぶべき所をとをして下へ続きたり。此格もきこえよかりけんべし。（下なる歌どもあるたぐひは、其を待ちそのうへも。二三の句などよからぬと難ぜしもありき。）

○ぞとかくてゝなど結べる歌　附つゝと結ぶ

夫木集
ちる雲はうき世をりたるかへる山かへるとぞ老にきたるかな
（此ぞは曽の字を書るれぞ写し誤りをといふひがごとし。なる字とはかへるく。見むと言ふことも正し）

後拾遺
さくら花かゝるにほひまさりたちるとみえけれをぞ風におほせつるかな

玉 十一 見てしとぞまさるうつゝの君ひかれそまどふらはうく沢の芦
ないづまもとてゐをそそのもん 凡雅十九うすれきそ法ちふるけと弥柾ふ ちぎりける君ぞおなれぬむかな。これハとをぞ
と写し得たる一本もとしけるよろし。堀川百首少さくかるせこの羽衣きてみれ
ぞゐすと本文ハうつにぞおくるを写もも写得たる一本よ乱みるとけるぞ宜しき。○新後拾遺六
恋のおもひのゆ風見きえてかぶりもえしれぬやぞふりつ。此ぞも写し得たり。
古本にもそとけりこれよろし。見てぞとかへてつゝと結ぶも例あし あがてと

○動かぬ言にて結ぶぞ

古十八 神無月志ぐれふりおける楢の葉の名におふ宮のふることぞこれ
ぞことまと有りける事 万葉にもこれまでれる本文ぞといへれしてことと後
更にいまと万葉九の歌なり見しより

後十三 もみちふるに君ひとりびそ帰るさゝ人のあかろそそれぞよのつね

後拾十一 おが見くみた道見とおくてよひくに芳まえしなむ恋ぞその哥と

新拾十八 かくさ糸はあそ伏ざさてや結ぶましちぎりぞ人の古き玉緒を

後後拾十七 年経まで加えりをやらぬ名取川うき身ぞ今ハ影をはうれ本

古十七 大かたは月をもめでじこれぞこのつもれバ人の老となるもの
此ぞもとおめのものといふ事て結びされバ同じ格ごとまぞこのといつる上のこ
と八月をさし。下のこの老をさせりむべくとまぞこのことやこのみどらふ
詞をこなたしくされ示けるすもみだりにいふべきよしたれど。
へてふをはのそのひをとよく見るべきものぞ。

後十八 うぐひすはなよひぞけりぞわきでろを行きまバ人をよそふてそらんめ

狭衣 わえなるわが身ぞふじの山よ。など ゆきつのまなほぶりさちつゝ
こまハよ など といふ詞を下へそへてめづらし。
など といふ詞も上へつきたり

古十七 みなうへすりかづる舩乃ぬまなしバちゝぞと有りといへまし物を

千十二 わきもなしやおのふところの名なしバことぞおもまともみえさまし物を

万十八 法らし苦いまぞさうりと人さいへど数ハさぶしと思ふしけるよバ

これらも同じ格なる例ども也と交て下へつゞきたるなし

○いひきりて結ぶぞ

千又 雪ふればまがきのきハつもりしどと思ひかくにぞちる葉ハ花

古十七 なかぎりにうつるたゝとハかちもしねどむぞなりぞちゞ深乃そぐし

新十五 うつろふ色をあかぬ秋かなの秋なれど今ハよそにてぞきくの上の露

拾六 よかるきばこゝろきのこぞつらし挿しておもべき侘どきおもしねバ

後拾十九 有てやもあせざるべき津の国のいまぞいくさの杖といひしあし

千六 あえかりていまぞあしぢにかゝる山こゝろゆるにの名にてそゝけ

新十七 ならくきそむくしをのこぞしのぶ草葉末結ぶ露に袖ぬらしつゝ

同上二 めしさげやたりふむをさそのこハえぞやましろの井手のたまみ

此歌ハやまぢといふまでのいひかけなれども とまるべき所ぞといひてとまりた
よくせるにいひかけをなしとでかくてとゞめしかるべし

古十三 あひくてまれにこよひぞあふ坂のゆふつけ鳥ハなかずもあらなん

これとハ同じといひかける相ねて切れのとつき又ゆふつけ鳥そても切れ。下の句のつゞきたる所ハ餘の格と異也。やの意のいひかけの格びりし此格にあてはむべし。

○ぞ二つある歌

古九 水へゆく程ぞなくなるはなてこし数ハたらでぞちりにける

拾一 梅といひてあらはにてぞふる山かれの花そしもぞうつろひぬらん

同九 なれ名よぞ人のつらさハ忘られし忘らし身をぞ恨らし

玉葉又 秋ぞうつる月とみえしハ書てよくへし影をさるかなぞあろ。これも同じ格なれども ここにくいやしくて二つのぞのしいと聞ゆなるし

拾七 おもかげにたちくる君をまでぞ恋しきことぞともぞおもはれ

これらハ上のぞハかゝりといふにて結びより下のぞハ切るゝぞなるを
とゞと定て活きてよるなり

堀川
夏　秋風にうちなびく尾花を夕まぐれたが袖[ぞ]と。[ぞ]おやまされける

これハ上のぞハ向ふるぞにて。留るをとゞと定て活きを下のぞハかゝるにて
むすびなり

○切るゝぞ　何のうちにもおくぞし

古十一　いでわれを人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころ[ぞ]

同十二　我が恋はゆくへもしらずはてもなし逢ふをかぎりと思ふばかり[ぞ]

後九　浅してふふかしともいふしみ山の井はあかりし心に契りえしぬ[ぞ]

詞十　花ざくら折りまでも見ればちてふかりなんいづれを月のみる[ぞ]

後廿　君がためいのちふかゝらん深ければよの中のへと[ぞ]

君ぞとあるべきを万葉なるとこれより見ゆるなり

古四　名にめでて折れるばかり[ぞ]女郎花われおちにきと人にかたるな

同十三　ことにいでていはぬばかり[ぞ]みなせ川下にかよひて恋しきものを

拾古　見る夢のうつゝになるはよのつね[ぞ]うつゝの夢になるぞかなしき

千十三　かねてより思ひし事[ぞ]ふし柴のこるばかりなる歎きせんとは

新二　うき人のふみをさへかくしかならぶてふるふ[ぞ]まがせこ花かづらせよ

又ぞと切るゝをとゞと定て下へ活きたるなり

古十五　人しれずたえなましかばわびつゝもなき名[ぞ]とだにいはまし物を

後三　又もこむ時[ぞ]と思へど頼まれぬ我身にしあれば惜き春かな

同九　逢までのおもひし[ぞ]とは知りながら玉の緒ばかりなにによりけむ

又

古十二 わがごとくものやかなしきほとゝぎすときぞ。ともなくよたゞなくらん

同十三 秋の夜も名のみなりけりあふといへばことぞ。ともなくあけぬるものを

此二つのぞハかろし時ぞことぞと切て　下へつゞけるを八上のと同じ　又

後拾十五 ながむれば月さへはれぬあはれまれ此世ならぬ所をぞかし

新十七 いかにせんさ川が岸まではなくの竹かれにけるともよの中ぞかし

同六 もみぢ葉はおのが染たるいろぞかしよそげにおけるけさの霜かな

千十七 たまもみなよれ身ぞかしと思ふともむなしく草はいづれかの那

此ぞかしハ切るゝぞの下へかしを添たることばにてかしハ切るゝ意の下へおく辞にて多くゆの意かしの類ナり

〇疑ひて留るぞ

此ハ必上に何等の辞をおきてぞと切る也

拾二十 あくにさへはれぐもなくほとゝぎすまちてひの杜ハいづくぞ

後一 春なりといふぞ梅やあはれみ川枝さへいろとかちし沢

拾十二 夏かとも思ひけるかな旅やかせしあふぞころにわかれされを

此ハちふいふなどの下に他の文字をへだてゝつゞけてぞといへり　又言を中におきてぞとしるして

後六 きみなべし草むらごとにむしてふるたまつ虫の声にまようぞ

同十六 うつゝぬまにゑしたきもおもふ代などられしきふまどふこゝろぞ

拾八 みちぬれやはるかしれ枝さしながら越へし人をあくていくよぞ

同十 おもひ出るえぬきのはちのさげられてなりぬ都を偲ふ八たが子ぞ

新六 いかにしよまでことしそんみなかへハいかぞかりふく岸のあらしぞ

源氏早蕨 いかさなりしむかし語べる事知りて此世にかく法中のへだてぞ

後七 まことゝきをよくお露がみぞ　けがやどの庭の露が末をるとがそみして

拾十四 いかだかりくるしかりけりのぞかづらきの久米路の橋の中は絶ゆるぞ

同十八 いくよへしいそべの松ぞむかしより立よる波や数をしるらん

文

金八 あさましやこハなにごとのさまぞとよ恋せよとても生れざりけり

堀川ゐそ なさけあれば花のちりくはゆふしほにあふぞそききき秋の夜ぞとよ。

これハ下にとよといふ辞をそへたる格とよの後にそへの也よの歌ニ出せり。

後拾さ十己にかゝりし人まくべくとゆるしぬへきなをやまきさのむかしぞこハ此ごとくもハし

○ぞも

これも上の回にあるぞにもを添たるもちかしハことなし

六帖 あらさへ乃さかりもかくしたき日は里はたゞつゝしもたがためにぞも

源氏絵川 いそれてふ法のなりぬよの一こともいふなる人もかゝるりのぞも

六帖 たまふより思ひみだるゝころぞもしらぬぞ人のつらさまりける

文

古八 かへる山なにぞもありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ

同十二 いのちやもなにぞも（ぞも 六帖）露のあだものをあふにしかへばをしからなくに

同十九 まそかゞみなにぞもよきかゝるやのみをきてゆきてあひきてもみむ

菱万下 かし添よふなにぞも寄はおきつる草のまくら波あらぞくちなん

○ぞも

これも上の回にあるぞにもを添たるも

古一 色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

同四 ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも

後拾四 いそぎつゝ家出そきつる山里のし川よるさとめる秋の月ぞも

新十六 むかしきく乃雲にもいでゝ春の夜ごと山越ひなにぞも

堀川 かやり火をまぢかくたてゝ山がつのおのれ煙りにむせぶなる【ぞも】

○ぞや　これも問かくるぞにやさ添ふるもやは疑ひにけれど歎息のやし

拾七 いさりせし海士が衣へしいづく【ぞや】絞めぐるそでとしほしそ

新勅十三 小侍従 いかなりしときぞや【ぞや】著にえしてはそれさへに今ぞ忘るゝ名にはさ

此るぞひいふぞやなふぞやなどゝ文字多しいづれもやはらかなひ乃やよ似られたるなりけれど歎息のやなり

源氏あげまき いつ川【ぞや】と花のちらむに一たえし末本さへや秋をさびしき

このも同じぞやなるぞ今世の俗言にいふ何んぞやと問ひかくなり
○なぞやは何の意何の訶り也なり

○一つのそ　これは清てよめり但し実は濁べき字濁るべき処なれど次

後十六 みらし君いく【そ】のよゝに年をへてうつふのこゝろきを待てそへつらん

拾古 あさはしや本結下葉のいかにしかいく【そ】の人乃数をえつらん　ことまきかいひしの金葉八

同十又 かぎりなき思ひのそらしみちぬればいく【そ】のかぶりやしくなるらん

好忠集 えだもたわゝにおきまよふかと思ふまでいく【そ】かゝれる萩の上かな

同 ながらふる宇治の川瀬に年つもりいく【そ】月日をかぞへきぬらん

兼盛集 あしたづのむれゐる末はまつしぞいく【そ】かさねの千年経ぬらん

新古 うき人の月はなに【そ】のゆかりぞと思ひながらもうちながめつゝ

此なにぞは何かなぞのみくすと共あるまじ。のし来て。下に向かるぞは行ねをまふけしれば。いくそのそに同じくきこゆ

上件いくそのそは十ぞそと思ふれど。古今集抄にいくそぞく木よと文字の歌にそとよめるをとえれば十にそ行して添へる辞なし

おぼしきなにか出せりかし然ればいくそとびなどいふそも同じ

くて十よはあしざるべし又十のそはなしばかり古今の歌にその

〇もぞ

くちあるハ例なきむかしまやけらん。さだめがたくぞ

これハ物事をうれへてかしこかりて。けやぶむことにて本意そこ。つみのぞと

一つなげしことなれる也。結びハ常のぞ小同じ。但しんと結べる例なし。せん

なぐハふべきかぎをもさるとやうにむすびしもり

後十八 ぬきもぬれて思ひもきてど衣よそへてあやなく身 もぞ する

全一 春雨し ぬれてたづねん山ざくら 雲のかへしのあらし もぞ ふく

汀三 秋山乃清水ハくまじにごりなばやどれる月のくもり もぞ する

新十 玉のをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわり もぞ する

後十 天の川なかれてこひぞうく もぞ ある けハとも思ふせにもなやくらん

又同じきながしけやぶむことハ好きともかれよ有

正治二年百首 柴の戸のあとみるばかりしをりせよわすれぬ人乃かりにも もぞ とふ

新十八 うつろひてとまりし跡をたづねよりへ我 もぞ する 覚えしのま

新勅古百十 立かへり思ひみて もぞ 思ふ これなれはあらしもたまきいかにもなりぬを

これハしぐれのまかりけるのしまて。常にぞと同じ上の格とハ異也。新古今より八

此てふりなをは後ことさられあり。古今集よりとあることハ此格さへまでで後撰

十七定家ても末なきかなきくなべき事を見にそへて今ハさりぞかぎり有らること多

此格なりし例なり

〇しもぞ

これハしもとしぞを重ねたる也。ぞハ清みのぞ結をなす

もぞのことばにハあらず。しもハ却てとりなすことを強くいふ也

古一 青柳の糸よりかくる春 しもぞ みだれて花のほころびにける

拾六 よそにのみ思ひてぞ見し人 しもぞ 昨日今日ころ旅ゆきける

同七 あふさかも人かきくるの しもぞ 花のあるらむとさぐりそふなる

後拾 十一
うれしさを思ふべかりし身なればしもぞいとど歎きのそふ心ちする

後拾三 後撰
けふしらぬちりのこしばといひしかどえこそしもぞまされ恋しき

新古
天の戸をおしあけがたの月見ればうき人しもぞ恋しかりける

此うたのしもハ都ての意をふくませたる

○さぞ

後拾 十
思ひやるあはれなにはのうらさびて芦のうきねはさぞなかれけん

新勅八 忠家卿
秋あそび乃表紙おもふらに宮をかまくらより秋とさぞながむらん

続後十三 ためよし
そともされぞなくたえぬべきかつら山ぢの宿はさぞつらん

続古 五
ふく風とさぞまがふらしうつしきくからまつのもの秋乃夕ぐれ

門 十八
夜寒なるはやのまどくさの秋風にそよさぞ床もあさふかん

後拾 十
ながめつるそらをかきくもらん思ふまゝにさぞとしる人のなき

玉葉十八に、ふやまさぞあるらんとおもひがてかへすゞく月をみるかなしまさへ。又ハ上下やといへるさぞの意にかはれり

又下にをを添ふることなし

千五 和泉式部
ちるとみばさぞなむつましき雑ぞといひあへ給ふらむ花のさかりを

新四
深からぬ外山のいほりのねざめだにさぞな木のまの月はさびしき

下十
袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ思ふ方より通ふ浦風

又やを添ふるハめづらし

続古十三 公実卿
ゝ旅をきくまゝ川よもひきかはらひてましためてこぬハさぞやつらきと

又なの歌などくあしらへたることあるかで、さぞ然ぞと
いふことを己がうへのさしあたりたる事にいへるもあり。

新 又 あき袖まし抽やふかくさぞ[さぞ]なおくかなしき秋のならひなれど□

続後拾 定家 [さぞ]なげく恋をするがの山うつつの夢みえとえし弥ぞ

堀川 為有 きりぎりす秋のうきねぞ我もさぞ[さぞ]我もよすがら鳴あかしつる

○やぞ　□　四の巻やの部に出せり

○なくぞ　□　あきなきらせぞ□　ぞのたぐひなり　五の巻なの部に出せり

[の]

○の　□　のの詞は。紐緒の中の行はかくの辞にて。□□□ぞや何などゝ同じきです。上に出せる三種の結びに於かぬし。□□□但しぞや何にくらぶれバ。のはやや弱きなり。

りの定まれる格にかなへることなれば何の疑ひなし。左にあぐるがごとし。

古 二　山吹はあやなゝ咲きそ花見んとうゑけん人[の]こよひこなくに□

同 十四　何ふまでのかくさ我をあふせんよえてもこゝろ[の]なぐさめなくに□

同 十五　秋のゝやよ秋うぐひすと鳴まびん人のこゝろ[の]花とちりなぞ□

同 十七　ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとハ思ふ年[の]へぬれば□

新 十三　われをかぎりすらるまじきたよりなれ我ながらうき人[の]月にぞ見る□

かゝるはおほくあまたことも有けり

又

古 六　花の色は雪にまじりて見えずとも香をだにゝほへ人[の]しるべく□

後拾 十七　きえもせで何へぞそらの秋の露ぞかりそめなしやとゝ人[の]とへかし□

かくさまなるもあまたあり

又

金一 ちるが惜しれたゞ香ばかりちらして花にハ風の[の]ぬきとめなりけれ

これハぬ゜へくるされども下へつゞきてけると返れり

又

同三 今よりハ心ろゆるさじ月影[の]ゆくへもしらず人さそひけり

新三 むすぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月[の]かたぶきにける

これハぐもと定まれる格のてにをハなるを結びてハかくたゞかきなる格をもてけると結べり

千六 玉づさにあらぬまぎれて待らちしてあへぬものかなと[の]なくなりけ

これハなるとむすびてもわろからぬ也又なりけれとあるもおなじこれもあしきなり

件のてにをハいづれと定まれる格にハなづまざりけり。そや何などにハかく

反例なし。のとりてろ異なる事也 然どもなほこれのごとく定まるなとか

どく結ぶてハいとま異なる例なれども。それを知りいまはひよみける也。

○ののむすび

ゆめくこれをおひてみだりにもよむなかれ次

○のの結びまでなりければて切る詞 これらいくらもあるべし

古七 ちはやぶる神[の]きりきん[の]くかゞかく子年の坂ともとえぬべらなり

万九 むこぎし結ぼれし[の]玉[の]あさごとみだれにけるかな[の]せ川の瀬をり

六帖 春野[の]いくぬくらし[の]なごの海士のつりする小舟さし帰る見ゆ

拾玉 くれなゐの庭の秋[の]なりにけり[の]夕されの萩方おそく

○ののむすび中にて終る語 三つをつゞけたればなきにかぞ

古二 今もかも咲きにほふらん橘[の]小島[の]崎[の]山ぶき[の]花

いせ物語 あしびきどもの山[の]うぎり[の]わた[の]日[の]夕暮なさへ暮りしきつる哉

これハ四つつゞけるなり

万三 いほはらの清見の崎のみほの浦のゆたに見えつゝ物思ひもなし
此歌五つまでかさなれる中に浦のゝのは俗にがといふ意にて上四つのとはこと也
云つる
新六 冬がれの森の朽葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ
こゝは四つと二つと云べし
又
同二 風かよふ寝覚の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢
これも三つゞゝ二つに作り袖のゝのハがの意にて句のつゞき異なり
○のと云まじる歌
古十五 吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか「人の心の
好忠集 野がひせし駒の春よりあさりしにつきずもあるか「淀のまこもの
源氏蛍 あらはれていとゞ浅くも見ゆるかな「あやめもわかずなかれける根の
栄花ゆふしで そこともなくふみしだきて有るを「冬の夜のかなしく独ねむらぶるかりの
○用の詞より受るの
古今 君やこむ我やゆかむのいさよひに真木の板戸もさゝず寝にけり
後拾 夕さればたのむひぞおほきまつ人のこむやこひしやのさだめなければ
新十三 わすれじの行末まではかたければけふをかぎりの命ともがな
同十四 うらみわび待じ今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空
同十六 有明の月だにかりしを思ひにまかる人なしの宿の庭とも
続後十八 後嵯峨院女 見し人もなきが数そふ春の世にいかにまちしもの秋の夕暮
万十二 丹波路の大江の山のさねかづらたえむの心わが思はなくに
又玉葉十一にあらしも今ハうしやの四方もすくれぞはるき月のよすがら
同十二 神しばりのこともいつぞうきまの月見えきて我はあやそぞろうき

同十三 羽のうきね思ひあまりのなぐさめは秋さへ浅きものを
風雅二 さびしさは花よりつきのながめしてそのすゑにくらき
同十二 月ぞりすく涼しきうきをきく中に人のあとさへのなきくまゝ
これらは花をみてこゝろをしるべにみせる也そのよき様なるも
しく思ひしきもひびくなし

○さと結ぶの

古四 秋そぎ蝶まがしみふせてなく鹿のめにはみえずて音のさやけさ
同十八 高結らる峯のあきぎりたちぬれぞのこ思ひつきぬよの中のうさ
後拾 あふぎらり形くてのこぬるをが色を人なにかくる袖のうさ
同廿 夕されば稲りゆく露結ぶらして夜ごひきたる虫のかなしさ
此様なおいと哀れし此歌りのさを写し得りてきと出る本のたりふやうて後
世の人こそをきこるしゆるよ行るは紀びてしるすなりさと万葉にもあり
古今 序 咲花りし思ひつく身結あぢきなさ身にいたつきのいるもしらずて

続古今 定家 春たいのるりふのたぶるさかりこそ浩まるるをきたのしきをつゝみ
百三 さびられなくいまこせぢなるのと世川 春乃さやけさ ゆぎろ流よふ
文 かくのごとくなりぞりきいへり作まで是はいとまれなることも
全四 ち川 春は吉木結葉白く候ふるをこや小野山のこの寂しさ
好忠集 みそぎまと婦をとりまつる浜結をれぞのこつきせぬ袖やまろが身のうさ
これらは上にやと分くむれば一つの様とは異りしてのりにみえさもいさくか
ゆれり身のさびしさまろがこのうさといふ一句を一つの躰の語のごとくいひなし
くる詞としてみ結やといひて神なるそて結べる様と同じ
○後拾き十八羽れぞりなが出る此様を持ちかなを夜のくまもふかくかなしさあれ
え上よのとしいまぞをといひてさと思ひりみえづらしき様と又後拾十二羽にも
みね身川とみりし行芳の花のよのみじかくてゆくる身のさびしさこそ六のりにみあ
まぶもこのなぐし身りのさへなくらぶれぞのりじなきに同じ
○かくのうてさと結ぶ例をば次かの後にみせたる

○俗語よりとりつふさと結の

古十七　みのうへにうかべる船の□君ならばこゝぞとまりといはましものを

旧廿　をぐろさきみつの小島の人ならば都乃つとにいざといはましを

後拾十七　君がしるおつるなみだの玉ならばぬきかけてみせまし物を

千十　くりなしや思ふこゝろの色ならばこれぞくまなくもみえせまし物を

全八　ます川人の大空てらする月ならばぬるとたかくに影もみえてまし

此ましハ下にあらましといひましといへるおのづから一格のましなり

さて

古十二　恋しなるなるごのとこにみちぬきばみをつくしてぞあふべかりける

後十五　ぬるはやき三笠のやまはとほかれどしらむのことゝりぬれ

旧十六　おもひ出てとふ言の葉をたれみましみのしらくもにならまし

同十九　わがこひゆくその雲の井にかりゆきばかりならんとぞ定めつゝ

旅十七　船戸明てながむるやたれならむなげきのおりぬおもひの空はるひつく

後拾七　君が代はしら千代のうちにて見ゆる松かえの影なる松乃みどりに

同八　こゝろをばすてゝしも八加なりつまはやしや何のくま浪まつらん

同廿　人のなりしなてびしさるぬ猶ありしかばおもひかりやとこゝろみてまし

同十　みなかみのさだめてければ君が代に二たびすめる堀川乃みづ

新一　何方はちしぬじは。乃ぶりの春は。冬は。夜になびく曙は。秋ら

同二　風かよふ寝ざめは。袖の花は。香にかをる枕は。春は。夜は。夢

万八　都にと思ひし小野の秋風にしをれぬるや萩の花

右の歌どもいづれもものゝがよろしへしえればいかでよくき

こゆるし乃のと思ふ　此右なる二首へのが□おかくまなりぬる中に一つ此の□さて上下

よくせずバまざひるべし

○のかくとゝまる詞の□

古十　よしの川いは浪たかくゆく水[の]はやくぞ人を思ひそめてし

同　夕月夜さすや岡べの松乃葉[の]いつともわかぬ恋もするかな

こゝなるは水のごとく松の葉のごとくといふ意にて此格古歌にいと多かり

○言をへだてゝ下へかゝる詞の□

古二　夏の夜[の]ふすかとすれば郭公鳴一声にあくるしのゝめ

後十一　あまぎらしゆきてやみましはの雲[の]今をかぎりて浦のはつ鴈　又六帖

後拾七　宇治川[の]はやく行どろもなりにき何によりてか瀬をばわたらん

○いきおひあるの□

新什　ちりひろふ露さしては露の声ばかりめやどるる月[の]袖のせばきに

後古二 後京極摂政　かぜふかばなきやひのいとそ見んさへうし人[の]花ちらさりを

こまつ袖のせばきに月のやどるらん花のさかりを人のとへうしといふを二首ながらいつもより袖ふのりにいきおひあり又新古今又きりぐさ秋さむき秋のあるまくによそろ露のそぼちゆくといふのもおなじくいへど朝のそぼちゆくと畫につきて上へかゝらざる類の二首とはかはれり

○一つ詞の□

千十　大かた詞恋する人ちりきくなまえてよの法[の]とや君おもふらん

これはよのつねの恋かやといふなる此の字文字ハつねにおはりをいふハこれらの例ハきはめてまれ

好忠集　人妻と我[の]とふもて川思ふ事ハなれとし袖に一つのなれはさかり

これもわが妻とくいふことにて右の首はの□と同じことなるをいひさすのまとし老あるらし此首ハ辛とこそとよみてよあり

○一つ詞の□

新十八　君が代ハいくらばかりか玉の緒[の]たえじといふはかなしきかな

此ハあらバ何を玉の緒にせんといふ本歌をとりて。玉の緒と云る下へたえなばの句のなせんとぞいふを。きやめて三の句とて。ことハ切るゝを其玉の緒をやがて下へいひつゞけたるなり

月十九 いさゞ川 きしやまぶきに秋[の]ゝ色下つ岩根乃まゝ川のゆふ風

此ハ秋といへる下へあらんといふ事をふくめて。きしやまぶきに秋あらんといふ意にて秋なきてことハ切るゝを。その秋をやがて下へも用ゐて松の風ハ秋のおのまゝといふなり

右の句法。たゞ一首とりたるにてハてにをはあひやうあらバなべて詞右のとのかくむつかしく詞をつゞけひとつゞけるりあり。これハ大形に。

後世にハおぼろき詞人乃まねぶべき格にしあらじ。

○猶の []

古十四 うつせみの世の人ゆゑ詞ぞしきものぞまがれぬ。[猶の]かくぬ哉ゞし

詞二 なく声をきこえぬ。[猶の]うらしきハ春のびのおもる空すり月さ

新十三 いせ物語 恋こんといひしよぶとふるとぬまこだしたのまぬ。[猶の]こひつゞふる

○のや [] 此ハ上の語にいふべき所へやを添へたるものにてやハよくかろし

古十 何ゆゑ[のや]殊の事ぞなく 拾十四 万 いかれ[のや]いかれ詞の事なく

新後拾十九小大君 あまき[のや]赤賊の祭る人ぞ八ぞく 万二 あらん[のや]弓角山の事く

六帖 河内[のや]かくしけ山の事く 定家 あつせ[のや]ゆづきが下に事く

日本紀の歌にもあふみのやをあまたよくごらくよまり 又地名の下ならでも

万十四 みなと[のや]芦が中なる事く

播川百首 萩の歌 ふしき[のや]むもらく花とりえある弐

又六帖よこよひのやなく此ハ万葉の歌を直せる誤し又玉葉十八にわしのやなく ことハかうしやといふよの添あり例なきむごとなり

○疑ひの辞ある下におくの []

古一 春月みき詞よりあつくにやちるさへの袖ありをへて人[の]ゆらるらん

同古 ゆふくれぞゆく飛鳥の川のよどみなどゞりかりけりなや人[の]おりてらん

同二 雪とのみふるだにあるをさくら花いかにちれとか風のふくらん

同四 昨日こそ早苗とりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく

同八 いのちだにこゝろにかなふものならばなにかわかれのかなしからまし

こゝろハ上よや何などうたがひの辞をおきて下をその結びにてとぢむる中間にかくのうけし此格いとおほし

古一 春たてバ花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく。

同八 けふ別れ明日ハあふミと思へども夜やふけぬらん袖の露けき。

後十五 大あらきのもりの草とやなりにけんかりにだにきてとふ人のなき。

拾七 神なびのみむろの岸やくづるらん立田の河の水のにごれる。

千四 秋風やなみだもよほすつまならんおとづれしより袖のかわかぬ。

新四 秋篠やと山の里やしぐるらんいこまのだけに雲のかゝれる。

これらハ上なるやとかゝりてらんと結びてさて下に又そのこゝろをいひてとぢむる格なり。此格もいとおほし

件ののりどハ清ミにごりの外に異なるなけれどかやうの所ハなほ ぞのといふべき格なるを彼是しらんためにいだせり。

○これのこれやといふの 後拾遺にいさやかくの春の日やなどいへるたぐひなり 上の意やの所にいだせり

○かものとはさまで結びもの外格とはなし

【が】濁

古十九 さかしらに夏ハ人まねさゝのはのさやぐ霜夜をわがひとりぬる

拾一 わが宿の梅の立枝や見えつらん思ひの外に君がきませる

同十九 恋しそハあらくとなし君がなどのひ見にじにも名[が]さきさきぬ□

万二 わがせこをやまとへやるとさよ更て暁露にわ[が]立ぬれし□

同 さゝなみの志がさゞれ浪しく／＼に常にと君[が]おもほせりける□

右の歌共の結び皆の此格也□
又むすびハみだらしぬが□也

古十六 ぬる[が]うちにみるをのみやハ夢といはんはかなき世をもうつゝとハ見ず

後九 秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひいづる[が]うれしげもなし

同廿 めくませといひふをまれなる皆ながらこふ[が]とめハかひぞ有ける

同 あらよゆきく[が]中にもかなしきハ人のなさけをつきやしぬらん

拾廿 よの中にあらましかばとおもふ人なき[が]おほくもなりにける哉

○さと結ぶが□ □

古十三 うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見る[が]わびしさ□

後三 風をだにまちてぞ花のちりなまし心づからにうつろふ[が]うさ□

同十五 なげき木にまがへる枝も有ものをききゝすきらふ[が]わりなさ□

万四 とほくあらバわびてもあらむを里ちかく有と聞つゝ見ぬ[が]ともしさ□

此格なども万葉にはおほし。すべてさと留る歌。辞の活の下を受るハ皆のと□
いふまりのの格に歌どもおほし。又よせるがめし。用の活の下をうくるハ右のごとく皆がと□
かぎる也。但し万葉に妹が□かなしさなどいへるハ辞の活の下なれどがと受さる也
此ハ特次にいへり

○つゞけハのと□いふ所をも万葉にハがといへることおほし。古今集よりこ
なたハ辞の活の下をうくるハの□用の活の下をうくるハが□也。但し見が□おの□
かたが□君が□妹が□などの類也。辞の活乃下なれど。後までをがといへり。そのほか
萩が花□梅が枝□鶯が□甲斐が嶺などもむすびもがとつゞけるなり。

○ぐるわきとのが　六の巻ぐるの終に出せり